

## 第十八回吟遊同人総会報告

Yoshiniko FURUTA  
古田 嘉彦

二〇一五年七月二六日、板橋区立グリーンホールで第十八回吟遊同人総会が開かれた。

最初に「吟遊・夏石番矢賞二〇一五」受賞式が行われ、受賞された石倉秀樹さんに、賞状、色紙、賞金、夏石代表の句（「未来より滝を吹き割る風来たる」）が揮毫され、たうちわが贈られた。吟遊俳句賞は、今年も該当者無しであった。

総会は夏石代表の挨拶で始まった。その中で「雲を見るのが数少ない楽しみの一つだが、雲が今までと違うパターンで出ている。東京ではほとんど夕立も無い。数年前から世の中色々な変化が起きている。その中でどういう俳句を詠むのが試されている。それはチャンスでもある。『吟遊』は自分の言葉を消さないことが大事だ」と述べられた。

次いで自己紹介。石倉さんは、俳句作品が七月に四四四四句になったとのことであった。山本一太郎さ

んは四十二歳、古田嘉彦は六十四歳と年齢が紹介されたが、星の王子さまにみんな数字が好きだねと言われそうだった。

鎌倉佐弓さんからは、自分が平家の落人の子孫らしいのが分かったという話があった。夏冬、田舎に帰っていたが、そこは山奥で、互いに気を使いあい、ひとつのものを大事にし、下には滅多に下りていかない暮らしをしている人達がいる。その人たちの特徴が自分に受け継がれているのに気づき、平家の落人を自分のルーツとして納得した。さらに編集報告では、評論が少ないということとで、執筆の呼びかけがあった。また翻訳者、校正担当を増やしたいこと等が報告された。

合評の一番手は、**石倉秀樹さんの吟遊・夏石番矢受賞作品**であった。

受賞作は吟遊第六三号から六六号までの作品から選ばれているが、各作品を読みながら、受賞理由にある「多様な形式による俳句表現の高度な実験」の跡をたどった。中国語での俳句的な表現とは何かを追求されている石倉さんだが、六三号の漢俳（漢字で五字、七字、五字）を訳すと、これは俳句ではないと分かる。少ない音節で多くを表現できるのが中国語の特徴で、漢字で五字あれば

文章になってしまふ。二字でも文章になりうる。長い詩は論理が必要だが、俳句は飛躍が特徴で、そこに違いがある。

六三号の漢俳から一句。

出門對碧山／詩翁額蹙呵禿筆／心痛扮謫仙

門ヲ出テ碧山ニ対ス／詩翁ハ額ヲ蹙メテ禿筆ヲ呵シ

／心ヲ痛メテ謫仙ニ扮ス

六四号、六五号の、二字、二字、三字の作品は、頭の字をそろえている。六四号は「夢」、六五号は「醉」である。各句の上、中、下は脚韻を踏んでいて、平仄平になっている。中の二字、下の三字の二句をもつて「章」になり、内容的には上の二字と中、下の五字の二つに切れる。遊びと様式美は紙一重だ。六四号から一句。

夢日／天馳／一韻士 夢に日あり天を馳せゆく一韻士

六六号は五字、五字、五字、二字の十七字になっているが、前半の五字、五字が詞書で、その後の五字、二字が俳句になる訳がついている。

酒毒襲醉生、啼血噴箋紙。好看百花燃、夢死。

詞書・酒毒襲ひたる醉生啼きながら血を箋紙に噴く

俳句・眺め好し百花燃えをり夢に死ぬ

漢字で十七字あれば、詞書、俳句両方ができるといふのを実際に作ってみせたわけで、色々対句も組み込まれ

ており、ただもうあきれるばかりの高尚な遊びによって漢俳への批判をしている。

**山本一太郎の作品について**（報告・大里満紀）

タンポポは場所を選ばずアウシユビッツ

ユダヤ人の大量虐殺の場に立つての作者の心を、タンポポが救っているのが感じられる。

（夏石）山本さんの人間がよく出ている。活字だけでなく、声で読み上げられると作品がよく分かる。芭蕉は「奥の細道」で歌枕をたずね、歌枕を詠んだ和歌を超えたところを句にしたが、違う環境に出会って短い俳句でどう対処できるかで俳句作者は試される。「ポーランド」は、意味が明確に書かれていて、意味を超えた世界がある。

（石倉）大里さんの報告で、彼の作品の核がよく分かるようになった。

**古田嘉彦の作品について**（報告・山本一太郎）

作品において、ありきたりな角度でなく、想像を超えたさまざまな角度から示されている事象等を、そのまま受け止めるしかない。

（石倉）伝達の手段でなく、言葉そのものが作り出す世界を構築している。詩を作る言葉の回路があるが、ひとつだけで配線していない。

（夏石）皆同じやり方で作られている。システムティック

な書き方で、言葉の距離をはかりながら、微妙につながる言葉が選ばれている。その計算ができている。ありえないことが、言葉ではありうる。挑発ではなく、何かが漂ってきている。フランスのシユルレアリズム、ダダイズムの流れがここにある。しかし英訳する時困る。翻訳者も自分が分からない句は翻訳を引き受けない。

#### 大里満紀の作品について（報告…鎌倉佐弓）

作品世界に思いやりがあり、こまやかで豊かな心が感じられる。

水打って路肩の花に寄り添へり

芋掘ればくわんくわんの子芋達

浮き腰の菩薩死出の山越える

（夏石）「路肩」の句はさりげない俳諧味があり、「路肩」が言葉としていきている。「くわんくわんの」は方言であろうが、和歌で使わない俗語、漢語、方言を積極的に使うのが「俳語」だった。

（大里）「浮腰」の句だが、腰の定まらない菩薩がもしあったら、動いていって死出の山を越えてしまうことがあるかもしれないと思って作った。

（石倉）（和歌と同じように）宗教詠というのもあるのではないかと思う。

#### 鎌倉佐弓の作品について（報告…石倉秀樹）

鎌倉ワールドでは物にみな生命があり、意思があり、語ることができるところから口語俳句になる。語ることのできるものと人との共存は、アニメズムであるが、それが口語で書こうという原動力になっているのではないか。しかし文語混淆もあり、文語が混ざると、意思が引き締まり、肅然たる響きがそなわり、哲学めく。

口語でも男の口語と女性の口語があるが、女性の口語が生きている。

（夏石）男の口語は柄が悪くなる。俳句は様々な言語が混じりあってもいいので、口語、文語が混ざり合うが、まざる理由は句ごとに違う。

（古田）口語だとリズムが悪くなりがちなので、鎌倉さんはよくやっておられると思う。

#### 夏石番矢の作品について（報告…古田嘉彦）

各作品の世界、語り方の、幅の広さ、柔軟さ、多様さが特徴で、自在なイメージ構築による刺激で詩を作りだしている。そして生（なま）の現実や、詩的というよりは知的な関心によってひっかかるものを作品に持ち込むことも許容している。

#### 鯨引き寄せるあの人形の黒目

人形の小さな黒目が鯨を引き寄せているというのは、激しく求心力のある発想だ。小さな眼に巨大なものが集中



後列左から石倉、山本。前列左から古田、鎌倉、夏石、大里

し、鋭くなつて突き刺さっていくようだ。

眠りを乱す遠い眠り姫の決断

最初の「眠り」は私の眠りで、私の眠りを遠い眠り姫の決断が乱しているということであろうか。単に「決断」と言つて、どのような決断か分からないことによつて、作品世界が広がりをもつ。

眠り姫というのだから、眠っているのだとしたら、眠りながら決断するというありえないことも、作品の謎を深めている。

闇の深さ知らず叫んでいた誰に

句の最後で追いかけるように「誰に」と聞くのが、切迫した感じを作り出している。

この後、出席されていない、吉田艸民さん、たかはししずみさん、大橋愛由等さんの作品についても合評した。これについては残念ながら紙幅が足りないが、吉田さんの作品は、俳句表現とは何かということを問う作品で、今後も吉田さんには色々やってほしいという期待が語られた。

ついで、海外の作品の合評に移り、その合評をもつて総会を終えた。ここには書ききれないが、刺激的なコメントの飛び交った会であった。

その後山岸竜治さんを加えて、懇親会が持たれた。